

## 「贈ることば」

### 詩編 130編1～6節

聖学院大学 日本文化学科教授 黒木 章

私は70歳になりました。神様のみ名によって建てられた聖学院大学の創立のために地方の大学から招いていただいて27年になりました。大学の基礎作りに25年はかかると考えて参りましたがこの3月で定年退職です。本学の営みの中心である全学礼拝の奨励者として皆さんにお話できる場を与えていただいたことを感謝します。

ただいま一緒に讃美歌136番を歌いながら涙が溢れてくる自分にびっくりしています。私にとって最後の礼拝奨励だからでしょうか。

さて、人は誰もがその人特有の事情を抱えて生きているのではないのでしょうか。勿論、いいことも沢山ありますが、できればそうでない方がいいと考えるような事情や環境に悩んでいる人は多いのではないのでしょうか。例えば、生まれる時から重い病気を抱えている人、小学生の時或いは高校生の人に家族の支え手であった父親を亡くされて家計が苦しくなったので好きなスポーツに打ち込むことができなくなったとか、自分の夢を実現するために勉強したいのだけれども成績が伸びないとか、或いは好きな人がいても自信がないために愛を打ち明けられないなど、それぞれがその人特有の固い壁に囲まれて悩みながらもその壁を破って自分らしく生きたい、夢を実現したいと思っているのではないのでしょうか。

そこで、いきなりですが、お伺いします。あなたは自分が生きるゆるぎない根拠を持っていますか？ あなたは愛されていますか？ 或いはあなた自身は心から誰かを愛していますか？

私は、私にとって最後の全学礼拝の奨励で、これまでは勇気がなくて誰にも話せなかったことを告白的にお話しして皆さんへの贈ることばにしたいと思います。

私は小学生の前半ごろまで村では評判の泣き虫で極端な甘えん坊だったようです。大学生になって一般教養の発達心理学などを学んで、その理由を理解することができたように思います。こういうことです。私は戦争の終わりに近い頃に鹿児島島の農村で生まれ、そして父親のない母子家庭で育てられました。私が生まれたために母は貧しい中で本当に苦しんだようです。生まれたばかりの私を捨てたい、いっそ殺したいと思ったこともあったはずです。本当に私を捨てようとして1、2度は道端に棄ててみたけれども、その母の背中を追って泣き叫ぶ赤ん坊の私を振り返り、また拾い上げて暗く寒い家に帰ったのではないかと想像します。私は母にすら愛されない余計な存在だったのではないかと——子供の頃の私が評判の泣き虫で甘えん坊だったのは、母に棄てられることを恐れる赤ん坊の潜在意識が働き続けていたからではないかと思われま。

また、片思いですが、私は中学生の頃に初恋を経験しました。その女の子の父親はお医者さんでした。家に遊びに行くことも何度かありました。ところが、その女の子と私が仲良くなっていつか恋をするようになることを怖れてのことでしょう、或る時その母親が私を咎めるようなことを言いました。「あな

たは貧しい母子家庭の子である、何のとりえもないあなたが大事な娘と遊ぶことも付き合うことも許しません」という訳です。これは自分がどのように見られているか、いわば人生の厳しい現実を初めて知る経験でした。周りの誰からも愛されない自分はなぜ生まれてきたのか、と痛切に思いました。自分が周りの人に迷惑をかけるもの・排除される存在だと感じたのです。

幸い運動能力に優れていましたから、私は将来有名な運動選手になって自分の生きる場を築こうと考えたようです。そして高校生としては鹿児島で人々に知られる陸上選手になりました。しかし自分の身体能力を超える過剰な練習のために高校2年生の冬に体を壊し、将来の見通しが立たなくなりました。

中学生の時にはでっち上げた作文で大きなコンクールの賞をもらうことが何度かありましたから、自分には文才があると自惚れたのでしょう、高校を卒業する頃には将来は小説家になりたいと考えて公立の図書館に勤めることにしましたが、有名な児童文学作家であった当時の図書館長に、或る時「公務員としては行政職に就きたいと言う人が多いのに何故図書館勤務を望むのか」と聞かれましたので、将来小説を書きたいからだと答えますと、館長は「本当の意味での勉強をしなきゃ小説家なんかにはなれないよ」と忠告してくれました。そうなんだなあと自分で妙に納得するところがあり、作家になる勉強のためにもっともよい環境と思われる大学に進もうと考えてさらに1年間の浪人生活をしましたが、私はこの時に基督教に触れました。東京オリンピックのあった年です。

初めにお話したように、私は自分の生きる根拠と自分が本当に愛されることをずっと求めていて、それが私を基督教に向かわせたのだと考えられます。

教会には東大生を初めとする優れた青年が多く集まっていて、その生き方と学識とが一致するように誠実に努力し、土曜日の午後はいつも会堂の掃除の後に議論をしていました。それは私がそれまで考えていたような生き方とは違う世界でした。夏目漱石の『三四郎』の冒頭には、日露戦争の勝利に日本中が浮かれている頃に東京大学に入学するために上京する列車の中で、三四郎が広田先生に「熊本より東京は広い、東京より日本は広い、日本より頭の中は広い…囚われちゃ駄目だよ」と言われて、初めて熊本を出たような気がしたという場面がありますが、私にとって基督教との出会いは三四郎以上の大きな衝撃でした。所謂価値観の転換・世界観の転換を迫られてまるで足払いをくらって打ち倒されるような衝撃でした。私は私が存在する根拠を創造者である絶対的超越者即ち神様に与えられるだけでなく、周りからは排除されるべき私が生きることを許され、しかも誕生と誕生以後の数知れない私の罪をイエス・キリストが十字架における血まみれの苦しみによって贖ってくださったことで、今の私があるのだということを知りました。そして私に生きる根拠を与え、私の罪を贖ってくださったイエス・キリストに応えることができる生き方をしたい、何らかの努力や苦労は自分のためではなく、神様の恵みに応える働きが出来るような力を獲得するために必要なことなのだと考えて、大学に入学した1965年の4月18日に洗礼を受けました。

洗礼を受けて丁度50年になります。勿論未だに勉強も大学の教授としての訓練も不十分です。定年退職を前に改めて自分の力不足と怠けぶりを思わせられています。しかし、初めに申しましたように、神様は基督教大学である聖学院大学で働くためにこの私を招いてくださったのですから、私は全学礼拝の最後の奨励として皆さんに申し上げます。

皆さんの一人ひとりが感性豊かな若いこの学生時代、特に聖学院大学という場で、本当にあなた

があなたであるためのゆるぎない根拠を与え、あなたを肯定し、あなたが生きることの意味を教える神様に出会い、さらに罪にまみれ或いは失敗しても立ち上がる勇気を与えてくれるイエス・キリストの十字架における血まみれの死と復活という問題に正面から取り組んでいただきたい。これが皆さんへの贈ることばです。

本日は全学礼拝の奨励としては許されないような個人的なことをお話しました。最後に短く感謝の祈りを捧げます。

2015年1月15日 聖学院大学 全学礼拝